

北琉球奄美大島湯湾方言の 複数または例示を表す kjaとnkjaの形式的分析

新 永 悠 人

1. はじめに

北琉球奄美大島湯湾方言の人称代名詞は複数標識にkjaを用いる。これとは別に、本方言には普通名詞に後続するnkjaという形態素があり、複数の対象を指示することができる。どちらの形式も、日本語標準語の「など」のような例示の意味も表し得る。このkjaとnkjaに対しては、両者を同一の形態素とみなす先行研究（あるいは研究会での研究者の指摘）が存在する。その場合、(1) /kja/ という音形の部分のみを同一の形態素（具体的には形式名詞）とみなす分析（同時に、/n/は属格nuの異形態と見る分析）と、(2) どちらもそれぞれまるごと同一の形態素（の異形態）とみなす分析、の2通りがある。本稿では、それぞれの分析の非妥当性を論じた上で、第3の分析、すなわちkjaとnkjaを異なる形態素とみなすべきであると結論づける。

2. 湯湾方言の概要

北琉球奄美大島湯湾方言（以下、湯湾方言）の形態統語の特徴は、ほぼ日本語標準語と同様である（動詞における膠着的形態法、SV、AOVの統語的語順）。但し、母音音素は6つ（/i, ī, ə, a, o, u/）で、子音音素は22個（/b, p, t, d, t̄, k, g, k̄, c [t̄~t̄̄], z [d̄~d̄̄], c̄ [t̄̄~t̄̄̄], s [s~c], h, m, m̄, n, n̄, r, w, w̄, j, j̄/）存在し、後者には「喉頭化子音」と呼ばれる音類がある（例：/w̄aa/ [ʔwa:]「豚」）。音節構造は(C1 (G)) V1 (V2) または(C1 (G)) V1 (C2) であり、C1にはすべての子音、V1にはすべての母音、Gには/j/または/w/, V2にはV1と同一の母音または/i/, C2には語末なら/n/, それ以外では後続の子音と同一の子

音が入る。以下に湯湾方言の話されている場所を示す。¹ 本稿のデータは1923年生まれの湯湾方言話者（女性）のデータを利用する。

以下では、まず3節で湯湾方言において複数を標示する形式の使い分けを示し、4節で問題の所在を述べる。続く5節で問題となる分析を2種類提示し、それぞれ5. 1節と5. 2節で考察したのち、それぞれの分析を棄却する。6節で本稿の分析を提示し、最後の7節で結論と今後の課題を述べる。

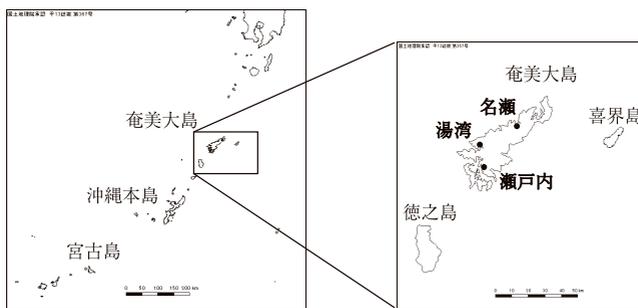


図1 琉球列島

図2 奄美大島周辺

3. 湯湾方言において複数を標示する形式

湯湾方言において複数を標示する形式はkja、taa、nkjaの3種がある。これらは前接する名詞によって使い分けられ、互いに相補分布する。²

(1) 湯湾方言において複数を標示する形式

前節する名詞	複数を標示する形式	具体例（カッコ内は単数形）
1人称代名詞	kja	waakja「私たち」(wan)
2人称代名詞		naakja「あなたたち」(nan)
指示代名詞	taa	attaa「あの人たち」(ari)
呼称詞 ³		zjuutaa「お父さんたち」(zjuu)
それ以外の名詞	nkja	warabinkja「子供たち」(warabi)

先行研究で考察の対象となったのは、上記のうちのkjaとnkjaである。以下の4節では、この2つの形式の分析に関わる問題を提示する。⁴

4. 問題の所在

湯湾方言の人称代名詞には単数、双数、複数の形態的区別がある。例えば、1人称代名詞は、wan「私」(単数)、wattəə「私たち二人」(双数)、waakja「私たち」(複数)となる。一方、普通名詞の複数性を明示する形態素としてはnkjaがある(例えば、warabi nkja「子供たち」)。

一見すると分かる通り、waakja「私たち」のkjaとwarabi nkja「子供たち」のnkjaには形式的・意味的共通点がある。そこで、この2形式を同一形態素とみなす分析の可能性が浮上する。その場合、以下の2つの下位分類があり得る。

(2) kjaとnkjaを同一形態素とみる分析の2パターン

- a. それぞれの /kja/ の部分は形式名詞であり、/n/ は属格nuの異形態である。
- b. kjaとnkjaは、それぞれまるごと、同一形態素の異形態である。

(2a) の分析を取る先行研究は管見の限り存在しないが、以下の2つの理由により、この分析を考察の対象とする。①湯湾方言の体系(名詞句の修飾部のふるまい、および形式名詞の存在)を考慮に入れると生じ得る分析であるため。②著者がいくつかの研究会で発表(湯湾方言の複数標識に関するもの)をした際に、合計3名の研究者から異なる時機にその可能性を問われた分析であるため。

(2b) の分析は、kjaとnkjaを別々の形態素とはみなさず、同じ1つの形態素の異形態(例えば、英語の複数標識の/z/、/s/、/əz/ 同士の関係)と見るものである。奄美方言の先行研究において、このような分析を取る研究は2つ存在する。⁵ 1つは奄美大島北部の名瀬(図2を参照)で話されている方言を研究した上村・須山(1997 [1983])である。同方言にも、「kja」、「nkja」という形式があり、それに対して以下のように述べている(同書:442)。

kja 例示の「など」に当たり、同類のあることを示すとりたてに用いる。
人称代名詞と語末がⁿNの語には、この形で付くが、その他には、Nを介して

付く。人称代名詞に付いたものは、複数の代わりとなる。

また、奄美大島南部の瀬戸内（図2を参照）で話されている方言を研究した水谷・齊藤（2007）においても、同方言の「キャ」、「ンキャ」（および「ヌンキャ」）という形式に対して以下のように述べている（同書：78、脚注19）。

人称代名詞に接続し複数を表す場合には「キャ」、その他の名詞について複数を表す…（中略）場合は「ンキャ」または「ヌンキャ」として実現されている。…（中略）本稿では「キャ」、「ンキャ」、「ヌンキャ」を、接続する名詞または音環境によって交替するバリエントであり、基本的には同じ意味、用法を持つものとみなす。

上記の2つの研究はどちらも、人称代名詞に後接するkjaとその他の名詞に付くnkjaを同一形態素の異形態として扱っている。

本稿では、結論としては（2a-b）の分析をどちらも棄却する。それぞれの分析は以下の5節で考察する。

5. kjaとnkjaを同一形態素とみる分析の考察

本節では、kjaとnkjaを同一形態素とみる2種類の分析を考察し、それぞれの分析を棄却する。まず、4節の（2a）で示した分析を5.1節で考察し、それを棄却する。次に（2b）の分析を5.2節で考察し、それも同様に棄却する。

5.1. /kja/の部分は形式名詞であり、/n/は属格nuの異形態であるとする分析

kjaとnkjaにおいて、/kja/の部分が複数を表す形式名詞であるとする分析は、著者がいくつかの研究会で発表した際に聴衆から問われた分析である。結論を先取りすれば、この分析はいくつかの問題があるため、（少なくとも湯湾方言においては）採用できない。

まず、議論の前提として、湯湾方言に関する事実を述べる。まず、人称代名詞が普通名詞を修飾する際は、waa jaa「私の家」のように表現する（jaaは「家」を意味する）。一方、普通名詞が普通名詞を修飾する際は、warabi=nu jaa「子供

の家」のように、属格のnuを用いて表現する（以下では、接辞境界にハイフン「-」、接語境界にイコール「=」を用いる）。また、属格のnuはjama=n nizii「山の裾」のように /n/ という異形態を持つ。そこで、waakja「私たち」という複数形は、waa「私の」という形式がkjaという（複数を表す）形式名詞を修飾しているのではないか（つまり、waa「私の」+kja「たち」という分析の可能性が生じる。同様に、warabi nkja「子供たち」という形式は、warabi=nu「子供の」という形式がkjaという（複数を表す）形式名詞を修飾しており、同時に属格のnuは異形態のnと交替しているのではないか（つまり、warabi=n「子供の」+kja「たち」という分析の可能性が生じる。

しかし、上記のkjaとnkjaの分析には以下の4つの問題がある。

(3) kjaを形式名詞とし、nを属格nuの異形態と分析した場合の問題点

- a. 2人称の非尊敬形（urakja「お前たち」）においてのみ、形式名詞と分析されたkjaが他の代名詞とは異なるふるまいをする。
- b. 属格nuのnとの交替の条件が例外的になる。
- c. 属格nuのnとの交替が義務的になる。
- d. 属格nuが例外的に動詞の「テ形」に後接する。

(3a)を論じる前に、まず、人称代名詞の体系を網羅的に以下に示す（議論の便宜上、双数形と3人称は省略する）。

表 1. 湯湾方言の人称代名詞（自立して使用可能な形式）

	単数	複数
1人称	wan「私」	waakja「私たち」
2人称	尊敬 nan「あなた」	naakja「あなたたち」
	非尊敬 ura「お前」	urakja「お前たち」

表 2. 湯湾方言の人称代名詞（他の名詞を修飾する形式）

	単数	複数
1人称	waa jaa「私の家」	waakjaa jaa「私たちの家」
2人称	尊敬 naa jaa「あなたの家」	naakjaa jaa「あなたたちの家」
	非尊敬 uraa jaa「お前の家」	urakjaa jaa「お前たちの家」

表1は自立して用いることができる形式（名詞句の主要部を埋める形式）であり、主格のgaや対格のbaを後接させることもできる。表2は他の名詞を修飾する形式（名詞句の修飾部を埋める形式）で、waa jaa「私の家」のように用いる。形式に注目した場合、表1の形式の語尾に（nがあった場合はそれが落ちて）aが付加されたものが表2の形式となる。

もし、複数を標示するkjaを形式名詞と見るならば、それは表2の名詞（jaa「家」）と同じように現れるはずである。従って、waa jaa「私の家」と同様に waa kja「私たち」、naa jaa「あなたの家」と同様に naa kja「あなたたち」と予測通りの形となるまでは問題が無いが、uraa jaa「お前の家」と同様に *uraa kja「お前たち」（*は非文法的形式であることを示す）とはならず、urakjaとなる点が問題となる。つまり、2人称の非尊敬形においてのみ、形式名詞と分析したkjaが他の代名詞とは異なるふるまいをする（具体的には、語末にaを付加しない）ことになる。

次に、湯湾方言では、属格nuがnと交替する条件が決まっている。すなわち、「NP1=nu NP2」という句のまとまりがある場合、NP2が空間を表す名詞（現時点では、sja「下」、ui「上」、nizii「隅」、mæə「前」、buci「縁」の5つ）のときにのみnuからnへの交替が頻繁に生じる（例：kii=nu sja「木の下」> ki=n sja）⁶。しかし、もしnkjaの（kjaを形式名詞とみたくえで）nをnuの交替と見た場合、空間を表さない名詞（すなわち、文法数を表すkja）の前であるにも拘わらず、nuがnと交替するという例外が生じる。

さらに、空間を表す名詞の前のnuとnの交替はあくまで傾向であるため、属格はnuのままでも許容される（例：kii=nu sja「木の下」）。一方、nkjaの最初のnは必ずnでなければならず、nuにした形は許容されない（例：warabi=n kja「子供たち」、*warabi=nu kja）。すなわち、nkjaの場合だけ、nuからnへの交替が義務的になるという例外が生じる。

最後に、属格のnuは動詞のいわゆる「テ形」（節連鎖や、助動詞構文における一つ目の動詞が取る形）に後接することは無い。一方、nkjaは以下のように、動詞の「テ形」に後接することができる（データは自然談話から得られたもの）。

- (4) mata un micjai=ja mudu-ti=nkja cʔat-tu, …
また その 3人=TOP 戻る-SEQ=など 来る.PST-CSL
「またその3人は戻ってなど来たから、…」

従って、nkjaの場合に限り、属格が動詞のテ形に後接するという例外が生じる。

従って、本稿では、上記4つの例外を想定するような分析は妥当ではないため、(2a)の分析を棄却する。

5. 2. kjaとnkjaは同一形態素の異形態であるとする分析

次は、5. 1節のような形式名詞や属格などの想定をせず、kjaもnkjaも同一形態素の異形態とする考えである。4節で述べたとおり、他の奄美方言においてはこの解釈が一般的である。

さて、3節の(1)で示したとおり、湯湾方言の複数(および例示)を標示する形式は、前接する名詞の語彙的種別によって相補分布する。同一形態素の異形態(allomorph)とみなされる必要条件是、共通の意味を持ち、互いに相補分布することであるため(Matthews 1991 [1974]: 106-107; Haspelmath 2010: 22-23)、確かにkjaとnkjaを同一形態素の異形態とみなす分析は可能である。また、その使い分けも、異形態の交替において一般的な「音韻的条件」(phonological conditioning; Haspelmath 2010: 25)ではなく、「語彙的条件」(lexical conditioning; Haspelmath 2010: 26)に依っているというだけであり、最初のnの有無も、音韻的条件によっては予測不可能だが、(英語のbuy/boughtの交替のような)「弱い補充法」(weak suppletion; Haspelmath 2010: 25)とみなせば特に問題はない。また、異形態のkjaは人称代名詞にのみ後接し、接辞としてふるまう一方、異形態のnkjaが普通名詞だけでなく動詞の一部にも後接し(5. 1節の例文(4)を参照)、(前接要素に統語的制約が無いという意味で; Haspelmath 2010: 198)接語(clitic)としてふるまう点も、英語の助動詞のbeの3人称単数現在形が自由形式(is)と接語('s)で交替すること(Haspelmath 2010: 200)を考えれば、両者の形態論的ふるまいが異なることも問題とはならない。

以上までは、kjaとnkjaを同一形態素の異形態として考えることに問題がないことを論じた。しかし、それはkjaとnkjaのみを考察の対象として考えていたためである。3節の(1)で示したとおり、複数(および例示)の意味を持ち、互

いに相補分布するという条件を満たすのは、この2形式だけではない。意味の分析は別稿に譲るが、(指示代名詞と呼称詞に後接する) taaにも複数および例示の意味が存在し (cf. Niinaga 2014: 190-195)、この形式はkja、nkjaとも相補分布する。もし前段落の理由により、kjaとnkjaを同一形態素 (の異形態) と見るならば、同様の理由で、taaもこれらと同じ形態素と見る必要がある。しかし、名瀬方言の上村・須山 (1997 [1983]) も、瀬戸内方言の水谷・齊藤 (2007) も、そのような解釈は取っていない。

さらに注意すべきことは、kja、taa、nkjaのうち、nkjaだけは、それぞれの形式に後接することが可能だという事実である (例: anma ta nkja 「母さんたち」)。ただし、自然談話の頻度においては、taa+nkjaの組み合わせが圧倒的であり、それ以外の組み合わせは非常に少ない。合計約4時間分の自然談話データを見ると、taa+nkjaの組み合わせは計46例出現するが (例: at ta nkja 「あの人たち」)⁷、kja+nkjaの組み合わせはわずか2例 (例: waakja nkja 「私たち」、urakja nkja 「お前たち」)、nkja+nkjaの組み合わせはわずか1例のみである (例: sjeito nkja nkja 「生徒たち」)。エリシテーションでの調査を行ったが、kjaおよびtaaにnkjaを後接させた形式と後接させていない形式との意味の違いは (現時点では) 特に見つけられず、話者も特に違いはないと述べた (自然談話での出現例は少ないが、エリシテーションではkja+nkjaの組み合わせは許容された。nkja+nkjaが許容されるかどうかは未調査である)。

ここで確認すべきことがある。湯湾方言においては、同一の文法的形態素が繰り返されることはほぼ皆無である。また、通言語的にも、同一の文法的形態素の繰り返しは非常に稀である (Haspelmath 2010: 98)。従って、もし上記の3形式を同一の形態素とみなした場合、そのような例外的な事態 (同一の文法的形態素が繰り返されること) を積極的に認めることになる。

従って、本稿では、kjaとnkja (および、taaとnkja) を同一の形態素とみなす分析を棄却する。一方、kja+taaという組み合わせは存在しないため、この2つを同一形態素 (の異形態同士) とみなす分析の可能性は残る。この時点でのkjaとtaaの補充法の関係を同一形態素の異形態とみるか、異なる形態素とみるかは、用語の問題に過ぎないと思われる (cf. Haspelmath 2010: 158, 脚注2)。従って、著者は、先行研究においてもkjaとtaaを同一形態素とする分析が無いことを踏まえ、現時点では両者は別々の形態素であると考えことにする。

6. 本稿の分析

5節の議論を踏まえ、著者は、kja、taa、nkjaのいずれもが異なる形態素とする分析を採用する。

まず、kjaは人称代名詞に後続し、複数を示す接辞である。

表 3. 湯湾方言の人称代名詞 (kjaを接辞とみなす場合；3人称は割愛)

	単数	双数	複数
1人称	wa-n「私」	wa-ttəə「私たち二人」	waa-kja「私たち」
2人称	尊敬 na-n「あなた」	na-ttəə「あなたたち二人」	naa-kja「あなたたち」
	非尊敬 ura「お前」	ura-ttəə「お前たち二人」	ura-kja「お前たち」

taaは、指示代名詞（例：at-taa「あの人たち」）、呼称詞（例：anma-taa「お母さんたち」）に後続する接辞である。

nkjaは、上記以外の名詞（普通名詞や再帰代名詞）、および動詞の一部の形式に後続する接語である（例：warabi=nkja「子供たち」、nusi=nkja「自分たち」、muduti=nkja「戻ってなど」）。

7. 結論と今後の課題

本稿では、湯湾方言において複数を標示する形式kja、taa、nkjaについて考察した。まず5節において、先行研究、および研究会の質疑で問われたkjaとnkjaを同一形態素とする分析が妥当ではないことを形式的側面（音韻、形態、統語的側面）から示した。それらの分析の問題点を克服した分析は6節で示した。

今後の課題としては、kja、taa、nkjaの持つ「例示」と呼べるような機能について、意味の側面から詳細に分析することが挙げられる。

謝辞

本文中で触れた「研究会」とは、以下の2つの研究会である。第96回日本方言研究会（2013年@大阪樟蔭女子大学）の口頭発表（「北琉球奄美湯湾方言の複数を表す形態素と名詞句階層」。第5回 文法研究ワークショップ（2014年@東京外国語大学AA研）の口頭発表（「文法数の恣意性：北琉球奄美大島湯湾方言において1つの対象を指す『複数』標識」。これらの研究会において貴重なご指摘をくださった方々に御礼申し上げます。

また、本研究は以下の助成を受けている。東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所言語ダイナミクス科学研究プロジェクト若手共同研究支援プログラム（2008-09 年度；研究代表者：下地理則）。日本学術振興会科学研究費補助金（2010-11 年度；研究代表者：新永悠人）「奄美大島湯湾方言の総合的記述研究および音声・映像データの保存・公開」。科研費（2012-2016年度；研究代表者：狩俣繁久）「消滅危機言語としての琉球諸語・八丈語の文法記述に関する基礎的研究」。

さらに、原稿を読み、貴重なコメントをくださった黒木邦彦氏（神戸松蔭女子学院大学准教授）に心より御礼申し上げます。

最後に、著者に湯湾方言を教えてくださいましたみなさま、特に元田サチ様と、直三男也様に心から御礼申し上げます。

記号と略号

∴: 接辞境界 =: 接語境界
 CSL: causal (理由) NP: noun phrase (名詞句) PST: past (過去)
 SEQ: sequential (連続) TOP: topic (主題)

参考文献

- 上村幸雄・須山名保子（1997 [1983]）「奄美方言」『言語学大辞典セレクション 日本列島の言語』、亀井孝・河野六郎・千野栄一（共編）、東京：三省堂、431-459
- 内間直仁・中本正智・野原三義（1976）『琉球の方言 奄美大島宇検村湯湾方

- 言』 vol. 2、東京：法政大学沖縄文化研究所
- 角田太作 (2009 [1991]) 『世界の言語と日本語 改訂版』、東京：くろしお出版
- 水谷美保・齊藤美穂 (2007) 「方言との接触による標準語形式の意味・用法の変容 - 奄美におけるとりたて形式『ナンカ』の用法の拡張」『日本語文法』 vol. 7-2、65-82
- Corbett, Greville G. 2000. *Number*. Cambridge: Cambridge University Press
- Croft, William. 2003. *Typology and Universals*, second edition. Cambridge: Cambridge University Press
- Haspelmath, Martin and Andrea D. Sims. 2010. *Understanding Morphology*, second edition. Hodder Education
- Matthews, P. H. 1991. *Morphology*, second edition. Cambridge: Cambridge University Press
- Niinaga, Yuto. 2014. *A grammar of Yuwan, a northern Ryukyuan language*. Unpublished PhD dissertation submitted to the University of Tokyo
- Silverstein, Michael. 1976. Hierarchy of features and ergativity. In Dixon, R. M.W. (ed.) *Grammatical categories in Australian languages*. Canberra: Australian Institute of Aboriginal Studies, 112-171

-
- 1 これらの地図はフリーソフト「白地図 MapMap (Ver 6.0)」で作成した地図画像を著者が編集したものである。
 - 2 (1) に示した「前接する名詞」の語彙の種別は、通言語的に「名詞階層」(Silverstein 1976: 122; 角田 2009 [1991] : 41)、animacy hierarchy (Croft 2003: 130; Corbett 2000: 90, among others) と呼ばれる名詞の語彙の種別におおまかに対応している。
 - 3 呼称詞とは、呼びかけに使うことのできる名詞である。年上の親族名詞の大部分(例: anmaa 「お母さん」、人名、役職名(例: soncjoo 「村長」)がそれに該当する。
 - 4 本稿では、複数を標示する形式はすべて「たち」(複数)で統一して訳したが、これらは「など」(例示)と訳すことも可能である。本稿の主眼は形式的分析にあるため、意味の解釈は別稿に譲る。
 - 5 湯湾方言の先行研究である内間・中本・野原(1976)にも kja、nkja にあたる形式は現れるが、それに対してどのような分析が為されているのかは判然としない。同書では、本稿の nkja がすべて「nkja:」のように語末が長母音の形で表れている(もしかすると、私の話者が 1923 年生まれであるのに対し、内間らの話者は 1890 年～1922 年生まれであるという世代差の可能性もある)。その「nkja:」の付いた形(「?ututuŋkja:」[「弟妹」])を同書 108 頁では「-kja: (複数接尾辞) が接尾したものの

と分析しているため、その「複数接尾辞」が果たして1人称代名詞の「wa:kja（私たち）」（同書：104）における「kja」と同一形態素とみなせるのかどうか、同書からは判断ができない。

- 6 kii > ki の変化は音韻規則による。具体的には、長母音の直後に、母音（または接近音）を伴わない子音（この場合は属格の異形態の n）が後続すると、その長母音は短母音になる。
- 7 指示代名詞は ari 「あの人」（単数）、attaa 「あの人たち」（複数）のような形を取る。また、子音連続の直前の長母音は短母音になるという音韻規則により taa + nkja > ta nkja となる。

（にいなが・ゆうと 成城大学非常勤講師）